まちとひとの記憶をほどいて編む

kioku手芸館「たんす」での試みから

呉　夏枝

編み物をほどく／ほぐす（写真：草本利枝）

ほどいた毛糸を絹にする（写真：草本利枝）

Kioku手芸館「たんす」。面する通りはかつて商店街であった町の記憶を色濃く残す

ワークショップには、地域の常連、地域外からの参加者など多くの人が集まった（写真：草本利枝）

2014年2月15日から3月9日まで、Breaker Project主催の「ex-pots 2011-2013」展が、大阪府立江之子島文化芸術創造センターと、西成区山王地域の2会場で開催されました。kioku手芸館「たんす」（以下「たんす」）にはこの西成区山王地域会場の、一会場として呉夏枝によるインスタレーション作品「光のけはい、ゆらめく影」と〈ニットキャップ人形〉が展示されました。

「たんす」は、大阪の通天閣に近いジャンジャン横町から数百メートルはなれた西成区山王の北門通り沿いにあります。家々の軒先には古くなったテントが掛かり、かつてこの通りが商店街であったことがわかります。この「たんす」も、鈴木タンス店の店舗兼居住スペースを地域のボランティアスタッフなどの協力を得て改装し2012年12月にオープンしました。1階はワークショップ工房と展示ギャラリー、2階は制作スタジオとして週2回開館し、「編み物をほどく／ほぐす」ワークショップと「編むワークショップ〜ニットキャップ人形編」を主な活動として行ってきました。また、2階は、鈴木タンス店のご主人が使われていた工具をそのままにしてあり、タンス店の記憶をとどめています。

「編み物をほどく／ほぐす」ワークショップ

2011年、Breaker Projectから依頼をうけて、山王地域での活動を開始しました。これまで、織物や編み物を記憶や時間が織り込まれたメタファーとしてとらえ、特に女性の「語られなかった記憶」―沈黙の記憶―をテーマに作品制作を行ってきました。ここ山王でも、まちの記憶をテーマに取り組み始めたのが「編み物をほどく／ほぐす」ワークショップです。回覧板やチラシで呼びかけ、着なくなったセーターや編み物を集め、参加者と共にほどくというものです。まちの女性たちと出会い、話を聞くきっかけとなることを期待したものでした。

最初のワークショップは2012年2月8日、山王地域にあるみどり苑というデイサービスセンターで行いました。以後、みどり苑でのワークショップは2013年2月まで、ほぼ月2回のペースで行いました。参加者は、女性、男性を交えみどり苑の利用者さんや、山王女性会の方が主な参加者でした。このような活動を続ける中、より開いたスペースでワークショップをしたり、私たちの活動を見てもらいたいということで、kioku手芸館「たんす」をオープンし、みどり苑から「たんす」へと場を移して活動を継続しました。もし、私がまちの女性たちから話を聞くのであれば、お宅を訪問して話を聞くこともできたのですが、どのような環境で話をし、聞くのかによって、生まれる会話もちがうだろうと考えたアイディアでした。「糸が切れると話も切れる」とおっしゃったのは、このワークショップの常連さんで、この言葉のとおり、編み物を介することで、幼少期の話や家族の話、昔の町の様子や、故郷の話、世間話など自然と語らう場になりました。

編むワークショップ〜ニットキャップ人形編〜

「たんす」の外観は、中の様子がわかるようにとガラス張りにし、扉はご近所さんの提案で引き戸にしました。オープンな外観が功を奏してか、沢山の人を招き入れ、情報を運んでくれます。

ある開館日、ご近所さんがこられ、「この近所に、同じ目数で編むだけでできるニットでできたかわいらしい人形があるよ」と教えてくださり、早速そのお宅へと連れていって下さいました。その人形はニットキャップにオーバーオール、ポケットに手を突っ込んだ仕草がかわいらしい人形でした。この人形は、ご近所さんから頂いたものだそうで、作者は、雑誌に掲載されていた作り方を見て作り、知り合いに配っていたそうです。私は、この人形を借りて、編図をひらい、編んでみました。すると、とても簡単にできることがわかりました。それから、ご近所さんに呼びかけて、一緒に編んでみることにしました。材料は、「たんす」に使わないからと方々から集まってきた毛糸を使うことにしました。

この人形を沢山の人と編んでみようと思ったのは、「ほどく／ほぐす」ワークショップで聞いた話がきっかけになっています。この地域には、地元の人だけでなく、移り住んだ人もたくさんいます。そして、お子さんたちは、結婚などを機に、別の土地へと移り住んでいると聞きました。このような人の流れを何か作品にできないかと考えていたところ、この地域から集まった毛糸でできた人形が、いろいろな場所へと広がって行く様子が浮かび、やってみることにしました。人形を編んでみると、模様や表情など新たなアイディアが湧くということで、何体も編まれる方もいました。最終的に参加者は86名、人形は183体集まり、個性豊かな人形がそろいました。

個人の記憶にはたらきかける編み物の可能性

「ほどく／ほぐす」ワークショップには、常連さんや、ときどき来られる方たち、また「たんす」の活動に関心をもった地域外の方が参加されます。

編み物は、方々から集まったもので、まずは写真を撮影し、記録シートを記入します。その後、ほどく部分と、残すパーツ部分に分け、ほどく作業がはじまります。ほどいた毛糸は綛にし、蒸しをして糸を延ばし、毛糸玉にもどします。この一連の作業は、とても地味な作業ですが、この時間に行き交うのは、過去や現在の話、そしてこれからの話と、整然とならべられるものではなく、時空があちらこちらへと移動していきます。この経験は、記憶とは、そのようなものだと実感する時間でもありました。編み物の記憶は、性別や世代を限らず、編んだこと、もらったこと、身につけたこと、手触りとともにあります。手に触れている編み物が、他人が着ていたものであったとしても、その毛糸の触感は記憶を呼び起こすスイッチとなります。そして語られることでその場にいる人と共有し、現在へとつながっていきます。これは、編み物というモノと行為が記憶をたどったり、想像力を働かせるきっかけになることを意味しています。

この様相は、私が、作品を制作するにあたってのコンセプトと通じるものでした。「メタファーとしての織物を織ることは、観念ではなく、その手触りとともに布を織ることで、確かな存在をあらわそうとする行為であり、沈黙の記憶を想像し、今に結び留め、未来へとつなげようとする身ぶりの痕跡を残すことである」。まちの記憶をたどるリサーチの一環としてはじめたワークショップが、このコンセプトを体現するものとなりました。

「ex・pots 2011—2013」展

活動の集大成として展覧会を行うことは当初から決まっており、その時を意識しながらの2年間でした。ワークショップの時間、すべてがそこにあることを感じながら、活動記録だけではない展示をどのように実現することができるのか。この2年間の大きな悩みでもありました。

最終的には、江之子島文化芸術創造センターの会場には、「ほどく／ほぐす」ワークショップでできた糸綛、糸玉、編み物のパーツをインスタレーション作品（『記憶の糸（2012—2013）』、『記憶のけはい（2012—2013）』）と編み物の写真作品として展示し、kioku手芸館「たんす」会場では、1階に『ニットキャップ人形』、2階には編み物の写真作品と約2年間のワークショップでできた糸くずの写真と織物のインスタレーション作品（『糸くずⅢ（2012—2013）』、『時間を紡ぎ、とどめてみる（2012—2013）』）を展示しました。

呉　夏枝（お・はぢ）
美術作家

ニットキャップ人形。最終的には183体が揃った（写真：福永一夫）

「たんす」会場2階の展示（写真：福永一夫）

江之子島文化芸術創造センターの展示（写真：福永一夫）

Breaker Project

2003年より大阪市の文化事業としてスタートしたブレーカープロジェクトは、芸術と社会をつないでいくことを目的とし、表現者と鑑賞者双方にとって有効な創造活動の現場をまちの中に開拓していく地域密着型アートプロジェクトです。芸術表現活動を私たちの生活に取り戻すことで、芸術・文化の裾野の拡大を図ると同時に、市民一人ひとりが多様な価値観を獲得し、それぞれの想像力、創造力を育み、成熟した市民社会が形成されていくことをめざしています。

（http://breakerproject.net/about/）